
翼を無くした鳥たち

斉藤雅夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼を無くした鳥たち

【Nコード】

N0786Z

【作者名】

斉藤雅夫

【あらすじ】

翼は何のためにあるのか。幼い頃から片桐は悩んでいた。きっと自分がヒーローになるために神様が与えてくれたのだと信じていた。しかし現実残酷だ。片翼の翼は飛ぶことができない役に立たない片桐は、翼を持つ少年少女に囲まれて、何を見るのだろうか。

プロローグ

君達の知るように、二十六年前から一部の人類にツバサが生えたのは、皆の知る由だろう。

空を自由に羽ばたいて、空の彼方まで飛び立った人を見て、君達は何を感じた？

純粋な子供なら、「すげー！」「かつこいい！」「俺も飛びたい！」など前向きな意見を述べるであろう。自分も飛びたい。あの空に浮かぶ雲の中を体験したい、と夢見てツバサに憧れの眼差しを向ける。まるでテレビの中のヒーローが実在して、自分ももしかしたらヒーローになれると錯覚していた。現に僕自身、そう信じて止まなかった。

しかし、現実は違う。

空を飛べない者は僻みや嫉妬をする。空を飛べない自分が、空を飛ぶあいつ等より劣っていると。人間はそんなものだ。自分が出来ない事に、努力をしていない人ほど嫉妬深く、時に狂気を起こす。誰も予想できないような。

僕がそうだ。

右の肩甲骨に違和感を覚えた、八歳の雪が降る夏の一日の事だった。

僕にも空を駆けるはずのツバサが生えた。片翼の。

大空を飛ぶには完全に相対な翼が必要不可欠。僕の片翼では空を飛ぶ事は許されず、学校の屋上から飛び降りたら死なない程度に減速するだけの、言わばパラシュートの様な存在。

幾度と無く挑戦した。空を飛んで、ヒーローになって、いじめっ子を懲らしめてやろうと妄想しながら羽ばたく練習を雨の日も雪の日も、雷の雨が降り注ぐ嵐の夜でもした。

所詮片翼は片翼。飛ぶ事の無い、ただ落ちるだけの翼。僕は飛ぶ事を諦めた。

僕にとって空は、嫉妬の塊となった。

そんな僕に追い打ちとなる朗報が届いたのは二か月前。

なんと飛翔都市プリズムから入学許可証が来たのだ。

全世界から選ばれたツバサ達が集まる学園に、空を飛べないツバサの被検体として欲しいと。もしかしたら空を飛べる可能性があるとう入学説明をしてくれたプリズムに内通する文部省の幹部が伝えてくれた。僕は心地よく承した。僕が諦めた空を、夢を実現させてくれると一ヶ月前にプリズムへ訪れた。

そして今日、全ての健康診断とツバサの分析が終わった。これで僕が飛べるかどうかが判明する。

僕は学生寮の部屋に帰宅して、分析結果が通知されたメールを確認する。

ノートパソコンを起動。新着メールが一通あります。僕は何の戸惑いも不安も恐れも無い。右人指し指を振り下ろした。

メールには、自分の事細かな身体情報と、血液検査結果、遺伝子情報、ツバサの分析内容が記載されていた。

僕はメールを一通り目を通して、最後の文に着目した。

開いたメールをゴミ箱に移して、消去。シャットダウンしていないノートパソコンを荒っぽく閉じた。

僕は駆け出した。

どこだって良い。例えば行きつく先が天国でも地獄でも無でも。こよりは夢が持てるだろう。

立て並ぶ灰色の立方体の間を駆け抜け、黒人白人黄色人種が入り混じる人垣を掻き分け、二酸化炭素を酸素に変え続けて地球温暖化を食い止めようと頑張る葉緑体を払い除け、空と海の境界線の世界へと辿り着いた。

憧れで嫉妬の象徴に向かって、叫んだ。息を切らし、喉が枯れても叫び続けた。

僕は神様に文句を伝えたかったんだ。

——俺に何故この翼を与えた！？ この偽善者！

僕はこれで人生を終わっても良いなどくだらない思想が廻った。でも本当に死んでも、どうせ本当の親がいる訳では無いし、一度の人生をここで終えても。

片翼のツバサを具現化させ、プリズムから飛び降りた。身体全体を空気が包み込む。気持ちが悪い浮遊感が僕に襲いかかった。

感覚で分かる。僕は飛んでいない。落ちている。学校から空を飛ぶ練習をした、あの感覚だ。

地上を見ると、海の青がだいぶ近づいてきた。確かプリズムは地上から1000m離れているから、この速度で落ちれば僕の身体はバラバラになれるだろう。

しかし、僕が死ぬことは、無くなった。

僕の左手が、雲のように柔らかい何かの感覚で支配された。

そこで落下して起きる浮遊感が突然消え、違う浮遊感だ。今まで感じた事の無い、空を駆けあがる感覚を初めてここで知った。

「僕、飛んでる？」

不意に空の青を確認する。

僕の手を、美しき天使が両手で支えていた。

金色に輝く髪と太陽の光が重なり合い、鮮やかに煌めいた。先程まで死のイメージしか持たなかった脳に、手で繋がっている少女の事ばかりが入り込む。彼女の美貌に、僕の全てが釘付けとなった。彼女の涙で潤んだ碧眼が、僕の網膜に、脳細胞に焼き付けられた。

「You must not die！」

これが、僕こと片桐伸二と数年後のプリズム生徒会長クロエ・ウオーカーとの出会いだった。

まあ五年前の話をしてもしようがない。今から今日の物語を始めよう。

人間という物は便利な造りになっている。飛べない事を開き直って考えれば気分が楽になる。

俺は確かに飛べない。しかし、それを恥じるべきではない。世界にはツバサを持っていない人が圧倒的に多い。しかも世界中探しても俺だけが片翼なんて、小説の主人公みたいだろ？ まあ実際には唯一飛べないツバサの被験対象として生活しているだけだが。毎日大変だけど。

何が大変か？ ここでは英語が共通語だってこと。世界各国から集められたツバサはその国々によって言語が異なる。そこで万国共通語の英語を喋らなくてはならない。

さっき言った様に、人間という物は便利な造りになっている。英語も一年ほどで大体慣れて、今じゃあ本場のアメリカ人相手にアメリカンジョークで笑わせることが出来る。日本語でね。

本日飛翔都市プリズムに存在する学校の始業式&入学式&ツバサバトルランキングの開会式だ。

俺は純白の石で積み上げられた、古代ヨーロッパを思わせるコロシアムの北側観客席にいた。

コロシアムには見渡す限りに人の大群だった。白い肌黒い肌黄色い肌は勿論の事、茶髪黒髪金髪白髪赤毛がアトランダムに入り混じる人波は、このコロシアムでしか見られない。

大概プリズムの住人は、自国のエリアでしか出歩かないので、ここまで綺麗に様々な人種が集まるのはコロシアムだけだ。

『レディースエーンドジェントルメン！ ついでに少年少女老若男女のテレビの前の皆さん！ 元気にしてたかな？ 今日待ちに待ったツバサバトルランキング初戦前日の前哨戦、在校生バーサス新入生のエキシビジョンマッチの時間だ！』

新入生という意味は、プリズムへ来る学生全てに当て嵌められる。つまりプリズムの新入りだ。

黄色いスーツに赤の蝶ネクタイを身に纏った司会者にスポットがあてられる。

ツバサランキングは世界中のケーブルテレビで配信され、視聴者は世界人口の5分の1だと言われている。まさに世界最大級のイベント。

『人類に翼が生えて早三十二年。人類の進化の証となるツバサたちの祭典が、今日この場で始まります！！』

人類の進化、か。その貴重な人類の進化をこんな狭っ苦しいところに押し詰めて見世物パンダにするなよ。

『ルールは簡単！ 空を飛び、炎を出し、雷を鳴らし、水を凍らせ、相手を倒す！ それがツバサランキングだー！！』

司会者の言う通り。空飛んで、能力使って、相手を殺せば勝ち。シンプルだ。

え？ 人が死ぬのにテレビで流していいのかって？ 大丈夫。死者は出ない。

ツバサ能力者の中に死者を蘇生する能力を持つ者がいて、その活躍によって今まで死者は今のところゼロ。結果的に死んだ姿をテレビに晒す人も、過去に数人いた。

『お待たせしました。これより選手の入場です！』

司会者の「入場」という言葉でコロシアムのテンションが最高潮に達した。

『ツバサ一部一三位！ 冷たい態度と毒舌の言葉は能力の所為？

氷結の姫、寅野美咲（とみの みさき）！！』

ツバサランキングは一部から五部まで存在する。一部はテレビ放送され、他の部は適当にコロシアムが空いている深夜などで行われる。一部には現在三十名の選手が登録されている。

「……………五月蠅い。さっさと次の紹介しろ、クズ司会者」

司会者の紹介の元、寅野美咲はコロシアムに上がり、早速毒舌を司会者に向ける。

コロシアムの上空に漂うドデカいモニターに、寅野美咲の足の先からねつとりと身体全体を見せつけるようなカメラワークが炸裂。今日もカメラマンはいい仕事をしている。

寅野美咲はランキング上位の上に見栄えも良く、ツバサビジュアルランキングでも上位に輝く美貌の持ち主。白人よりも白い純白の白魚のような肌、日本人とは思えない銀色に輝く白髪。それとは対照的に瞳には緋色の炎が宿っている。一般に言うアルビノ体質の女性だ。一年中肌と真逆の、漆黒のトレンチコートがトレードマークだ。寅野の対戦時には視聴率が跳ね上がる事で有名だ。ツバサランキングのアイドル的存在だ。

寅野の毒舌にも負けずに司会者は元気に声を出し続ける。

『本日も寅野選手の毒舌が冴え渡っております！！ 対するは、新しん入生代表ハロルド・マーク！ まだ能力の情報はありません！ どんな勝負になるか楽しみだ！！』

対する新入生は金髪白人の青年だ。身長は170ちよいで中肉中背。顔にまだ幼さが残る高校一年でとこか。

両者が所定の位置に着くと、司会者はコロシウムから離れ、会場に設置されているスピーカーから司会者の声が放たれる。

『今回エキシビジョンの勝敗は、相手を気絶させるか殺せ！！』

殺し合いと言っても、九割以上大会本部が両者のダメージを見てテクニカルノックアウトとして勝敗が決まる。稀に刹那に試合が終わり、片方が死ぬ場合がある。死んだらすぐ蘇生。

『さあ、試合前恒例の《握手》が始まります。コロシアムの皆さん、しばらくお静かにお願います』

司会者の《握手》に反応した観客が、5秒ほどで静まり返った。まるで嵐の前であるかのように。

寅野、マークの両者が互いに歩み寄った。マークが右手を差し出すと、寅野は左手を差し出す。

「……寅野先輩、なんの真似ですか？」

「別に。僕左利きだからさ。あと貴方が嫌いなだけ」

突如マークの肩甲骨より鷲の姿を模した光のツバサが具現化する。『おおーっと！ 神聖な《握手》で相手を怒らせた寅野選手！ あたりまえです。左手で握手は相手を侮辱しているサイン！ 余程マ

ーク選手の事が嫌いなようだ!!」

マークは空高く、目測百メートル以上飛び上がった。米粒以下だ。それを見た観客は、驚きと歓声の声でコロシウムを揺るがした。

『なんと驚き!! マーク選手が百メートル以上飛翔した!! ツバサの特殊能力は飛翔高度と比例するので、マーク選手の能力が強大であることが容易に想像できます!!』

寅野は盛り上がる観客と司会者を余所に、小さい唇からため息を吐いた。

『おや? どうやら寅野選手がマーク選手に呆れているぞ?』

「貴方、そんなに遠くに逃げて何がしたいの? 瞬殺されるのが怖いのか?」

寅野の相手を蔑んだ視線がモニターに大きく映し出される。男性特有の低音ボイスが大きくなり、女性の黄色い声が小さくなる。

「……………」

コロシウムから遠すぎて、マークの声が聞こえない。寅野の挑発に乗ったのか、マークは降りてきた。降りたより、獲物を狙って急降下してきた鳥、が正しい表現だろう。某変身ヒーロー宛らの一号キックポーズだ。

大きな鳥が自分を狙って落ちてくるのをただ見ている寅野。動けないのか?

『どうした寅野! まさか、まさかまさかまさか!! マークの急降下攻撃を受けとめようっていうのか?!』

その通りと言わんばかりに寅野は頭上に両手を掲げる。

『無茶だあ! このままでは寅野がバラバラになってしまふ!!』

司会者が心配する中、寅野はニッと口元を少し上げる。

寅野の肩甲骨からペンギンの羽を模した光のツバサが具現化する。具現化と同時に観客の熱気で造り出された真夏並みの熱気が、秋の肌寒い気温へと変化させた。

マークは風切り音を周囲に響かせ、寅野と正面で激突した。

岩が砕けたような轟音が観客の鼓膜を震わせた。硬い石のような

物が観客席へと飛び散った。俺は破片が目に入らぬよう瞼を閉じた。瞼を開け、マークと寅野の姿を確認する。見ると寅野が両手でマークの右足を受け止めていた。

二人の周囲には砕かれた氷の塊が散らばり、マークはペンギンの羽から延びた氷に囚われていた。

『流石氷結の姫！ 一瞬にして『氷の防御壁』を造りだし、マークの急降下攻撃を半減！！ 更に自慢の『氷の縄』でマークの動きを封じた！！』

マークは自分を取り巻く氷を壊そうと暴れるが、氷は壊れるどころか身体を浸食するように氷が広がる。やがて一つの氷のオブジェと化した。それを乱暴に地面に落とす寅野。

『これで決まってしまったのか！？ あっさり過ぎる！！』
が、氷漬けで動けないはずのマークの体に異変が起きた。

動くはずの無い氷の塊が少し動いた。徐々に大きく揺れ動く。

一陣の風が、コロシウムを駆け巡った。

風が止み数秒後、マークを覆っていた氷が刀で切断したように四つに分裂した。

『なんとマーク選手は風的能力者のようだ！！ 風で鎌鼬を発生させ、氷の牢獄から脱出だ！！』

首の関節を鳴らしながら、マークは寅野を見据えた。

「まさか、寅野先輩の実力はそんなものですか？ これが俺を倒す最後のチャンスだったというのに」

鷲を模したツバサを大きく広げ、寅野を威嚇する。そんなマークを見て、もう一度寅野はため息を吐く。

「あのまま氷漬けで終わってれば、死ぬ思いをしなくて済んだのに」
相変わらず毒を吐き続ける寅野。寅野の余裕な態度に「死ぬのはお前の方だ！！」と、ツバサを一度、羽ばたく。

風が吹き、コロシウムの石の壁や地面に鎌鼬でできた傷跡が現れる。

その傷跡が寅野に迫り来て、切り刻んだ。

寅野の身体から血が流れ出る。額、左腕、右足の太股から血が噴き出し、トレンチコートの中に着込んでいた無地の白いシャツを紅色で染め上げられた。

「良く避けなかったな。その場から一步でも離れたら、腕の一本以上が切れたのに」

「僕を試したの？ 上級生相手に遠慮するんじゃないやねえよ、下級生」
「試した、結果的にはそうなるな。ですが次の一手であな——」

突然マークの声が途切れた。マークは口パクをしている。俺が異変を感じてすぐにマーク自身も声が出ない異変に気付く。

『どうしたマーク！ 突然声が出なくなったぞ？ 寅野が何か仕掛けたのか！？』

「次の一手って何？ この私の一手で貴方が負けるって意味？」

マークは首回りを手で確認するが、何もない。マークは何を思ったのか喉の奥に手をつっ込んだ。観客はマークの奇行にざわめく。

「どう？ 喉の中を凍らしてみただ。呼吸が出来ないように気道を塞ぐように」

それを聞いたマークがもがき始める。これでは自慢の鎌鼬で氷を刻む事が出来ない。

『おおーっと！ なんとというドSな責めだ！！ 一発で相手をノックアウトをしないで、ジワジワと相手を痛めつけるとは、DM男には堪らないだろう！！』

マークはこの苦しみから解放してくれと言わんばかりに寅野へすがりついた。男として情けない。これではツバサランキングで生き残れないな。

「——！！——！！——！！」

「何？ 聞こえないよ。人に頼むときは、ちゃんとハッキリ声に出せてマミーやパピーに教われなかった？」

段々と動きが鈍くなるマークの瞳に涙が溢れだす。どうやらもう限界だ。決着だな。

結局寅野は血塗れのまま何もせず、呼吸困難でマークが敗北した。

『決まったー！！　こんな地味な終わり方で視聴率は大丈夫か？
まあ兎に角、マーク選手は五部から実力を付けて戻って来い！　と
いう事で、今回のツバサTVはここまでだ！　次回は明日の一二時
からだ！！　見逃すんじゃないぞ！　シーユーネクスト！！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0786z/>

翼を無くした鳥たち

2011年12月2日23時48分発行